

転」から親鸞は正定聚に住することが「自然」であると表明しているが、同じように「必」を「自然」とする親鸞の了解からいえば、「滅度に至る」ことも「自然」であると言える。つまり親鸞の自然の思想とは、『教行信証』の思索に照らして考えれば、本願力によって衆生に実現する証果、即ち「正定聚に住するが故に必ず滅度に至る」という証果をもたらす道理を語ったものに他ならないのである。

この理解に立って、仮名文類並びに法語の「自然」の意味を吟味していく必要があると思われるが、特に法語にはその冒頭において「獲得名号」が説かれているのであるから、これは名号を獲得することにおいて、自然法爾に実現する証果を説く法語であるとの視点を持つべきであろう。一見、親鸞晩年の特別な思想表現であるかのように思われる「自然」であるが、その源泉は親鸞が根本教説と見定めた『大無量寿経』にあり、そして自然の思想はすでに『教行信証』において表現されていると言えるのであるから、この両者に立ち戻って考察する必要性があると言えるのである。

註

- ① 『定親全』一・五〇頁
- ② 『定親全』三・一五八―一九頁
- ③ 『定親全』一・一八頁

『入菩提行論』第9章

第41偈の注釈における引用経典

— プラジュニヤーカーラマティ造 Bodhicaryavatara.jik.
からタルマリンチェン造 rGyal stras 'jug ngogs kyi
展開 —

桜井 智 浩

Bodhi [satva] caryavatara (『入菩提行』) については、複数のインド撰述注釈の存在が知られているが、チベット・ゲルク派の学匠タルマリンチェンにも、rGyal stras 'jug ngogs (『仏子渡岸』) という『入菩提行』全体に対する直接の注釈がある。その中で、第9章第4、第41、第50、第66偈の注釈部分に見られる「大注釈」或いはその「著者」という言及が、梵語原典が現存するプラジュニヤーカーラマティの注釈『入菩提行細疏』Bodhicaryavataraṇīka (『細疏』) を意味し、内容的にも『仏子渡岸』が『細疏』を適宜参照していることが分かる。このように『細疏』の影響を受けながらも、『仏子渡岸』では中観帰謬論証派(Pt.)に特徴的な理解とされる「声聞・独覺の法無我理解がある」と認める点【学説】を強調し、『細疏』から思想的展開を見せている。『入菩提行』第9章第41偈(IX41)の所説に関する『仏子渡岸』に至るまでの各注釈書の所説を、その時代的経過を踏まえ遡ること、その展開のあり方を探り、『仏子渡岸』の注釈意図をより明確に把握したいと考え、『入菩提行』IX41¹特にC、D句の解釈をとりあげた。

『入菩提行』IX41は次のようなものである。

【四聖】諦を見ることから、解脱がある。(が)空性を見ることに何の必要があろうか。

「この道なしに菩提はない」という経証があるから。

(Yaidra. ed. p. 202. l. 20. p. 203. l. 3. Tib. Der. la. 32a7)

この偈に対する『仏子渡岸』の注釈では、偈の「菩提」を三種とし、また空性理解が阿羅漢果を得る場合にも必然であることを示す。また偈中に見られる「経証」に相当するものとして、『般若経』が声聞の者にも共通に理解されるものとして取り上げられる。この偈に関する直接の注釈内容に引き続き、『細疏』について言及するが、以下のように『細疏』における経証引用を問題としている。

『入菩提行』の大注釈の中に『仏母経』[i.e. 『般若経』]の中に存在の想を持つ者において解脱はなく、また三時の正等覚と預流から独覚に到るまでが、正にこの般若波羅蜜に依止し「菩提を」獲得する、と言う説を引用する如くであるが、無上菩提のみに為すことは本文の意味ではないのである。

また、顕教部によって、声聞・独覚において法無我を了解することがあると説く無辺の経証が存在する[が]引用されてくる。(bKra shis lhun po ed. ngal27a6-127b2)

この『仏子渡岸』の言及を踏まえて、『細疏』を見ると、その内容は相応して概説する一方、IX41C, D句について、空性が全ての迷乱の断除に関わり、経証からその意味を正に理解させるために提示されると言う。この後、二つの引用部分からなる『般若経』が引用される。その内、前者は『仏子渡岸』IX41にお

る「存在の想を持つ者において解脱はなく」と言う部分に相当する。続いての引用は、『仏子渡岸』の「三時の正等覚と預流から独覚に到るまでが、正にこの般若波羅蜜に依止し「菩提を」獲得する」という部分に相当し、更に「菩提」が「三種」とされる根拠となっていると考えられ、『細疏』に示されるこの経証が、『学説』を示す意味で『仏子渡岸』でも重視されていたことが窺える。また、『細疏』では、『般若経』に続いて、ナーガールジュナ作と伝えられている『般若讃』17偈が引用されるが、『仏子渡岸』では、これについては直接言及されない。更に『仏子渡岸』に暗示された『学説』を示す具体的な経証について、上記両注釈書の所説のみの検討では不明である。

ツォンカバによる『入菩提行』第9章の講義録とされる『入菩提行』般若章注釈 sPyod jug shes rab le'u'i tikkā blo gsal ba (明慧) の『入菩提行』IX41C, D句に対する直接の注釈部分は、『仏子渡岸』とはほぼ同義であるが、『入菩提行』IX41中の「経言」に相当するものとして、『般若讃』を挙げながら「それでは十分ではない」として、『十万頌般若』『宝徳蔵般若経』『般若心経』を共に取り上げる。したがって、『仏子渡岸』の言及も『般若讃』も『学説』を示す経証であるが、例えば「明慧」に示されるような経が引用されないことを指摘している、と考えられる。ツォンカバ、更にタルマリンチェンの視点から言えば、『入菩提行』IX41の注釈にあたる『学説』の言及は、『細疏』での『般若讃』引用にその根拠を見出し、それを明示したのと言える。

更に遡って、ブトンの注釈書 *Byan chub kyi sems gsal bar byed pa zla ba'i 'od gsal* (『月光』) で作『細疏』所引の『般

『般若經』は引用されるが、『般若讀』はなく、かわって『明慧』所引のものに相当する『宝徳藏般若經』の一節が引用され、『月光』がツォンカバの所引に影響を与えたものと推定される。また、ここで引用される『般若經』は、『細疏』所引のものの要約であるが、相当するのは『細疏』IX41の所引の前半部分だけであり、『学説』を説く「 Γ 」の立場から言えば、経証としてより重要である「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」という部分は見出されない。プトン自身はシャーンティデーヴァを「 Γ 」であると断定していないこと、「入菩提行」が『学説』を否定するとの理解があったことを「仏子渡岸」が指摘することとも、関連が想定される。『細疏』以外のインド撰述「入菩提行」注釈書の中、「入菩薩行細疏」(Der. No. 3875b)は、『般若讀』17偈を引用しているが、『殊勝解明』(Der. No. 3880)では、『無分別讀』と称される上、『般若讀』17偈C、D句のみの引用であり、声聞・独覚については、『細疏』所引の『般若經』の要約を引用するものの、「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」と説く後半部分に相当するものは見出されない。偈の注釈内容から見ても、『殊勝解明』における了解では「入菩提行」IX41が、空性を見ることの殊勝性を述べるものではあっても、『明慧』、『仏子渡岸』における『学説』を裏付けるものとはならない。

以上のように、BCAIX41の註釈にあたって引用される『般若經』『般若讀』17偈、『宝徳藏般若經』が、Lam rin chen mo 等、ツォンカバの他の著作にも、『学説』に関連した文脈の中で、その教証として引用されている。これらが経証として『細疏』IX41の引用に端を発し、それ以降、インド、チベットにおいて

重要視されていたと考えられる。また、後代のゲルク派においては、人法二無我を解説するにあたって、「入菩提行」IX41自体が『学説』の重要な理証としての役割を担っていたことが窺われる。このように到った背景には「仏子渡岸」の所説が果たす役割が大きいが、その所説の形成には、『細疏』IX41、ことにそこに引用される経証の「声聞・独覚も般若波羅蜜に依拠する」と言う内容が根拠となっている。しかし、その経証の意味が『学説』を示すと明言されるようになるのは、『明慧』、『仏子渡岸』に至ってからである。

中国に於ける大乘思想受容の一樣相

——法華經を中心に——

采翠 晃

それ以前は漠然とした概念しか持っていなかった中国人に、最初に明確な大乘思想を伝えたのは鳩摩羅什であった。中国人が受けたその衝撃たるや、はかり知れないものがあるが、その具体相はどのようなものであったのだろうか。法華經に対する態度を中心に見ていくことにしたい。法華經は、声聞作仏を説くという点において、他の大乘經典とは明確に区別されるべき性格を持つており、中国人もまたこの点に注目したからである。従って、仏教全体を見渡そうとする時、法華經をどのように位置づけるかが問題とならざるをえない。

大乘大義章を見ると、鳩摩羅什は、自らが翻訳した法華經に対して、奇妙な屈折した態度を取っているように感ぜられる。勿論、